

みんな で 生きる

No.449
2017 8・9

特集●現地の保健医療従事者が育っています
ーウガンダー

✝
mlc
JOCS 医療を通じて、愛を世界へ。
公益社団法人
日本キリスト教海外医療協力会
JAPAN OVERSEAS CHRISTIAN MEDICAL COOPERATIVE SERVICE

1972年4月25日第三種郵便物認可 通巻449号
2017年8月10日（隔月10日発行）

ウガンダ・ペーパービーズで家計を支える国内
避難民の女性たち（撮影 事務局・松浦由佳子）



今年も、6月10日の土曜日の午後、信濃町教会の会議室をお借りして第56回定時社員総会が開かれました。会員の皆様と年に一回お会いできる貴重な集まりで、毎年のことながら非常に楽しみに出席しました。毎年お会いできる方から初めて参加して下さる方までおられて、皆様とご挨拶させていただけるのは本当に喜びです。会では、質問やご意見もいただいて、良い総会となりました。その後の懇親会でも和やかにお話ができて感謝でした。また、遠くにお住まいであるなど様々な理由でご参加いただけない方も、

小さなことに忠実に

…… 会長 畑野 研太郎

この時にあわせてお祈りいただいていることと感謝しております。

今年の総会には、初めて参加して下さった若い医師がおられて、皆の前でJOC Sのワーカー（海外派遣医療従事者）になりたいと発言して下さり、会場に拍手が沸きました。私たちのワーカーについて、ますます混迷する国際情勢とテロの脅威の中で、それでも「みんなで生きる」ことを目指して現地の人々と生活を共にして下さっているという厳しい状況を述べたあとにも関わらず、こうした想いを表明して下さった方がおられるということに、心から感動し喜びも覚えました。

ワーカーの置かれている環境は、もともと日本以上にリスクのある環境です。事故や病気など、日本では助かるようなことでも命に関わる危険は多いのです。その上、テロの脅威が増加しています。JOC Sも大切なワーカーのリスクを下げたいと努力していますが、世界に真の平和が来るまでは、そのリスクが軽減することはありません。私も若い時のことを思い出しました。あの時代でも、日本の友人知人からすると、私は無謀な希望を持ち家族を巻き込む人間に思えたことでしょう。異文化の中で働くには、苦しいことも数多くありますが、同時に喜びを与えられることも数多くあります。私にとっ

ては、苦しい時に祈ることを学べたこと、そして祈りの中でイエス様が共に歩んで下さっていることを肌で感じる事ができたことが、何よりも大きなお恵みでした。この『みんなで生きる』の読者の中にも、かつての私のようにワーカーとして召されることや、JOC Sを支えることを祈っておられる方がおられると思います。その方に、どうか祈り続けてくださいと願います。同時に、今あなたに与えられている召命、目の前におられる隣人と共に精一杯生きてくださることもお願いいたします。「小さなことに忠実な者は、大きなことも任される」（ルカによる福音書19章17節）とあるから

目次

- ・巻頭言
 - 小さなことに忠実に 2
- 特集■ 現地の保健医療従事者が育っています。－ウガンダ 3
- ・ワーカーからの手紙（山内章子、弓野綾） 8
- ・定時社員総会報告 10
- ・地区JOC Sから／ご入会ありがとうございます 11
- ・関西でのイベント報告 12
- ・お友だち紹介キャンペーン／フィールドセミナー参加者募集 13
- ・「子ども号」をいっしょにつくってみませんか？／新入スタッフ紹介 14
- ・イベント案内 15
- ・ワーカー募集／グローバルフェスタに参加します 16

現地の保健医療従事者が育っています。 —ウガンダ

JOCSは奨学金の支援先を定期的に訪問し、奨学生・学びを終えた元奨学生の働きや地域の医療事情などを確認しています。2017年3月にウガンダを訪問し、病院や付属看護学校、エイズクリニック、診療所で働く奨学生・元奨学生や関係者に会ってきました。誇らしげに働く姿や自信に満ちた表情、握手から伝わってきた奨学生の思い。限られた紙面ですが、彼らから託された支援者の皆様へのメッセージをお伝えします。



HIVに感染しても、人生が終わるわけではない

ウガンダでの奨学金事業は、現地の2つの協力団体を通じて募集や学費支給、卒業までの支援を行っています。今回初めて訪問したリーチアウト・ムブヤ(以下リーチアウト)は、人口の集中する都市部でHIV感染者の支援を行う団体です。2001年に14人のHIV感染者に対する支援から始まったリーチアウトの活動は、今では首都圏を中心に、9千人の感染者に心と身体、そして霊的な支援を含めた全人的ケアを提供しています。カトリック教会が母体ですが、職員はプロテスタント信徒やイスラム教徒も多く、約150人の職員の6割が女性、また全体の4割がHIV感染者です。JOCSはこれまで4名のリーチアウト職員に奨学金を支援してきました。その一人、アン・グレース・ナムビルさんをご紹介します。

「私はリーチアウトで初のJOCS奨学生です。1996年にHIVに感染していることがわかり、リーチアウトには患者としてサビスを受けにきました。しばらくしてボランティアとしてピア・カウンセリング(当事者同士のカウンセリング)に関わりはじまりました。そんな私をリーチアウトがJOCSに奨学生として推薦し、そしてJOCSのみなさんが私を受け入れてくださったのです。なんとこの恵みでしょう。

「HIVに感染しても、人生が終わるわけではない」。私はこのことを自分自身の歩みを通じて多くの人に伝えたい、そんな思いから活動を始め、今年で16年になりました。奨学金でカウンセリング

(注) ご本人およびリーチアウトの承諾を受け、氏名・写真を掲載しています。



アン・グレース・ナムビルさん(カウンセラー)
2005年から1年間の学びでカウンセリングの学位を取得

の専門教育を受けて、今は「デイ
スコーダント・カップル・カウ
ンセリング」と呼ばれる、どちらか
一方がHIVに感染している夫婦
向けのカウンセリングの責任者を
務めています。ウガンダではも
とと家庭内暴力が多いのですが、
特にデイスコーダント・カップル
の間では顕著です。適切なカウ
ンセリングは、そうした夫婦間の不
和を大きく改善できます。現在、
150組ほどの夫婦にカウンスリ
ングを行っています。これから
もデイスコーダント・カップルを
いち早く見つけ、寄り添ってい
きたいです。夫婦ごとのカウンスリ
ングの他に、ピア・カウンスリ
ングや当事者支援にも乗り出し
ています。また個人的なことですが、
親戚のエイズ孤児3人を預かり、
養育しています。このように公私
ともに充実した日々が与えられて
いるのは、JOC Sの皆さん、そ
してリーチアウトの同僚の支えの
おかげです。心から感謝してい
ます。」

**ウガンダの医療サービスを支える
非政府組織UPMB**

もう一つの現地協力団体で

あるウガンダ・プロテスタント
医療連盟(以下UPMB)は、
1957年に設立されました。

UPMBは、保健医療に携わる
プロテスタント教会(英国聖公会、
セブンスデー・アドベンチスト、
ペンテコステ等)の連合体で、傘
下に291の医療施設があり、そ
の大半は支援の届きにくい地方に
あります。医療職以外の職員も含
めると5千人以上が働きに携わっ
ています。ウガンダでは政府が提
供できる保健医療サービスが限ら
れているため、サービスのほぼ半
分はUPMBのような非政府組織
がそれを補う形で担っています。

2002年にウガンダへの奨
学金支援を始めてから、JOC
Sは、UPMB傘下の施設の約
120名の職員へ、奨学金を支
援してきました。今回の調査では、
そのうち首都圏3つ、地方の7つ
の病院・診療所を訪問し、医療現
場の様子を見聞きしてきました。
またUPMB責任者らともじっく
り話し合う時間ももち、進捗管理
や連絡体制を強化するためにUP
MB、JOC S双方でとるべき改
善策なども決めてきました。

的確な診断に

貢献しています

首都カンパラのビクトリ
ア湖畔にあるウェンツ・メ
ディカルセンターは、U
PMB傘下の診療所で、
2005年に欧米のクリス
チャン団体・個人の支援に
より設立されました。外来、
検査室、薬局、手術室、分
娩室、病棟(9床)を備え
た診療所です。外来患者は
一日に平均して50〜60名で
す。

2006年からこの施設に臨床
検査技師として勤務するムグ
ンヤ・ギルバード・タデウスさん(検
査室長)は、職員の中でも特に責
任感が強く、医療サービスの改善
に邁進する彼を皆が頼りにしてい
ます。訪問した時は、HIV検査
に訪れた女性の採血中でした。H
IV検査は保健省の標準実施要領
にそって、3段階の検査を経て確
定診断となります(各検査は10〜
15分程度)。検査の合間に話を聞
くことができました。
「私が入学した臨床検査学は3年
間のコースで、1年目の学費は自
分で、2〜3年目をJOC Sにご



ムグンヤ・ギルバード・タデウスさん 2011年から3年間の
学びで臨床検査学士号を取得

支援いただきました。奨学金が
あったからこそ学びを無事に終
えることができました。心から感謝
しております。

学びの成果は数えきれません。
まず、これまで使われていなかっ
た検査機器を活用できるようにな
り、検査の幅が広がりました。今
では生化学検査(腎機能検査、肝
機能検査等)も可能となり、また
培養や感度検出ができるように
なって微生物検査も行っていま
す。医療スタッフの多くは検査機
器を使えるようになることを目的
としがちです。でも、より重要な
のは、検査結果を解釈し患者の状

態を的確に把握することだと、私は考えています。ウガンダでは臨床医が必ずしも検査データを読み解けるわけではありません。ですから、この検査室が検査結果の所見を提供している意義はとても大きいと考えています。今では他の診療所向けにも検査サービスを提供し、周辺の約15の診療所の他、郡病院（50床）の検査も引き受けて、医師たちに検査結果を伝えていきます。この検査室が提供する検査結果に多大な信頼が寄せられるようになった証です。

現在、私にとって、またこの検査室にとっての一番の課題は、安全な検査体制の確立です。本来、生化学検査、微生物検査、結核検査、血液検査、寄生虫検査、血液バンクはそれぞれ独立した検査や標本管理のスペースが必要です。でも今はこの小さな1室で全てを実施・管理し、患者の採血もここで行わざるを得ない状況です。安全性の確立には空調や排気管理などの施設面の改善も必要ですが、財政的に難しいのが現状です。ですから与えられた環境の中で、部下には目指すべき姿を伝えながら、換気などを工夫し、最大限の

注意を払いながら検査を進めています。」

看護学校の指導者となって

首都カンパラ市内にあるUP MB傘下のメンゴ病院は、専門医師35名、一般医80名、看護師・助産師300名、薬剤師・放射線技師・理学療法士等200名を抱える病院です。その付属看護学校で副校長を務めるのが、元奨学生のナルワンガ・エステルさんです。看護教員を目指す後進の看護師・助産師の奨学金申請の推薦者として、毎年書類上でお名前を見かけていたエステルさんご本人と直接会い、お話を伺いました。

「助産師としてキャリアを開始し



ナルワンガ・エステルさん 2008年から2年間の学びで、看護教員の資格を取得

た私は、JOCsの奨学金のおかげで教員免許を取り、2010年に看護教員となりました。皆様のおかげで教える技術が身につけて、自信を持って教壇に立てるようになったのです。そのことをとても感謝しています。その後UP MBの支援を受けて看護学士号をとり、現在にいたります。

今の私に求められるのは、指導者としてもっと運営管理の知識や経験を得ることです。看護教育では生徒対教員の割合は30対1が理想的とされますが、ここでは121対1という状況で、適切な教育ができていません。教員の育成・増員は急務です。近い将来、公衆衛生か助産の修士号を取得し、こうした状況の改善に貢献したいと思っています。引き続き私たちをお支えいただきますよう、よろしくお願いいたします。」

ここに暮らす人々の健康を

守るために

首都カンパラから西に車で移動すること400キロメートル、コンゴ民主共和国に隣接するカセセ県（人口約75万人）は政府の医療サービスが十分でない地域です。

この県では、UP MB傘下の英国聖公会南ルウエンゾリ司教区が、病院1つ、診療所8つを運営しています。そのひとつ、ブハウラ診療所を訪問しました。幹線道路から四輪駆動車で30分ほど草木に覆われた細い山道を登った山の中腹にブハウラ診療所があります。眼下にカセセ市内、目を少し上げるとクイーンエリザベス国立公園の向こう側にコンゴ民主共和国が見渡せる、風光明媚な所です。しかし住民の健康を守ることは想像を越える厳しいものでした。ここで働きながら学ぶ現役奨学生、看護師ムレレ・ネルソンさんが、僻地医療への熱い思いを語ってくださいました。

「今、私は正看護師を目指して金曜日から日曜日に看護学校に通い、月曜日から木曜日は准看護師としてこの診療所で働いています。ここに暮らす住民は約7千人。それに対し、医師補1人、私ともう1人の准看護師の3人体制で、24時間、住民に医療を提供しています。以前は5人の医療従事者がいましたが、2人が政府の病院に引き抜かれ、現在は3人でなんと

か回しています。確かに大変ですが、この村で生まれ育った私は、地元の人々に医療を届けられる今、とても大きなやりがいと充実感があります。わざわざこの診療所まで会いに来ていただけて、とても嬉しいです。



ムレレ・ネルソンさん(右)2015年から2年間、看護コースに就学中



屋外で診療を待つ住民たち(プハウラ診療所)

この診療所は、人手だけでなく、スペースや施設・機材も不足しています。もともと職員宿舎だった別棟4室は、住民の必要に応じてエイズクリニック、分娩室、病棟として使い、残る1室を宿舎として3人で共有しています。外来患者は一日20〜40人で、入院患者はひと月平均50人前後です。この施設で対応できない帝王切開や手術は、ふもとの診療所かカトリック教会が運営するキレンベ病院にお願いするのですが、車がないため家族や友人らがオートバイか担架で担いで山を降りるしかないのです。臨月の妊婦も、重病人も…。このセンターまで登れる四輪駆動の救急車が与えられることを皆で祈っています。

電気は来ていませんが、太陽光発電でワクチンを保冷し、夜間は最小限の電灯を確保できています。水道はあるのですが、維持管理ができていないため水は出ません。このため近くの水場まで汲みに行ったり、大量に必要なときは近くの住民が力を合わせて持ってきてくれます。

今の私の課題、それは奨学金で学んだ技術をどう維持するかで

す。機材や医薬品が不足するため、残念ながら、学校で習得した技術を、今ここでは生かしきれません。分娩技術は特に住民の必要性が高いので、それを活用できる設備がこの診療所にあるとよいのですが、今はまだ通常分娩しか扱えない状況です。でもそもそも奨学金がなければ知りえなかった技術や知識を得て、病院実習の機会も与えられたのですから、本当に心から感謝しています。今後もJOC S奨学金では僻地の医療に携わる人材を育成していただきたいと願っています。

なかなか勉強に集中できない状況もありますが、最終学期を乗り切り、国家試験にむけてがんばります。学びの機会を与えてくださったJOC Sの支援者の皆様に、「どうかお礼をお伝えください。」

訪れた日、乳児予防接種、妊婦健診でそれぞれ10人程が待合におられ、別棟では分娩が行われ、入院を待つ患者も2人おられました。そんな多忙な中、ネルソンさんは丁寧に診療所の状況を説明し、何度も何度も「奨学金をありがとうございます！」と繰り返し握手をして

くれました。その手から、住民の健康に対する思いや彼の優しさが伝わってくるようでした。

南ルウェンゾリ司教区の保健担当官ビルヤンデ・ウイリアム医師は言います。「こうした厳しい環境の施設には、都市部で研修を受けた人は来たがらない。だから私たちの教区では、地元住民の中で仕える意志のある人を探し、育成しています。医療現場の人材難のため、過酷なことですが、就学はパートタイムを条件とし、週4日はクリニックで勤務を継続しながら学ぶ熱意のある人材をJOC Sの奨学生として推薦しています。」

ウガンダの奨学金事業について

ウガンダに対する奨学金支援は2002年に始まりました。UPMB傘下のチオコ病院で2000年から3年間、続いてマイルドメイ・センターで2004年から2年間にわたり活動した北川恵以子(けいこ)元ワーカー(医師)の派遣がきっかけでした。それ以来、ワーカーは派遣していませんが、リーチアウトとUPMBを通じて毎年20〜30通の願書が届きます。

今回の調査では、ウガンダ全体

の医療人材育成の状況を把握でき
たわけではありませんが、首都部
の施設では看護師・助産師の育成
がかなり進み、J O C Sに期待さ
れるのは麻酔科、放射線科、検査
技師等の専門人材や看護教員等の
育成が多く、ニーズが移行してい
る様子を垣間見ることができまし
た。その一方でカセセ県のような
地方では、いまだに看護師、助産
師の不足が著しく、医療人材のす
そ野を広げつつ、同時に専門技術
をもつ人材育成も求められています。

限られた予算を有効に使うた
め、国や地域、医療施設のレベル
や、職種・専門分野など、何に重
きを置いて選考したらいいのか、
とても迷います。

天が地よりも高いように、わた
しの道はあなたがたの道よりも高
く、わたしの思いはあなたがたの
思いよりも高い（イザヤ書55章9
節）―神様の望むことが成るよう
に祈り、毎年、J O C S奨学金委
員会は、出願者の熱意や長期的に
地元の医療に携わる意志、人材育
成の緊急性などを一つ一つの願書
から読み取り選考しています。

また事務面では、特に僻地で学

ぶ奨学生やその所属先とのやりと
りに困難も多いです。ウガンダに
限りませんがインターネットがな
い施設、郵便事情の悪い地域が多
いため、奨学生と所属施設、U P
M Bとの間に入って、送った書類
や奨学金が確実に奨学生や学校に
届いたかを確認できるまで、あち
らこちらに電話やメールをするこ
とも度々です。このため無事に学
びを終えた奨学生から、喜びと感
謝の最終報告を受けるとときの感
慨はひとしおです。

こうして奨学金事業を続けられ
るのは、お支えくださる皆様のお
かけです。引き続き、どうぞよろ
しくお願いいたします。

（事務局 松浦由佳子）



司教（左から3人目）はじめ南ルウエンゾリ司教
区関係者の皆様と。左端が司教区の保健担当官。

ウガンダと日本

ウガンダでは、ほぼ本州と同
じ広さの国土に約4149万人
（2016年）が暮らしていま
す。言葉は英語、スワヒリ語、ル
ガンダ語の他に多くの部族語が話
され、宗教は大きく分けて、キリ
スト教（6割）、伝統宗教（3割）、
イスラム教（1割）と言われてい
ます。

どこへ行っても日本の中古車が
走っていることに驚きました。聞
くところによると、ウガンダを走
る車の9割が日本車とのこと。悪
路にも耐え、修理が簡単な日本車
が頼りにされているそうです。
また日本でキリシタン迫害が
あったように、ウガンダでもかつ



「神が備えてくださる」のメッセージを
つけた乗合タクシーのあとを行く、守ら
れた旅でした



コンゴ民主共和国まで見渡せる
ブハウラ診療所の前で

てキリスト教徒への激しい迫害
がありました。1885年から
1887年の間にカトリックの信
徒22人、英国聖公会の信徒23人
がいました。今では殉教者を記念す
る巡礼聖堂に、毎年5月末から6
月最初にかけてアフリカ各国はじ
めヨーロッパからも多くの巡礼者
が訪れるとのこと。

ウガンダと日本との違いはいろ
いろありますが、何といっても目
につくのは子どもの多さでしょう
か。ウガンダの女性は子たくさん
で、一人あたりの出生率は5.8
人（2016年）。訪問した医療
施設でも、乳幼児を連れ、同僚と
交代しながら授乳したり、面倒を
みたりしながら働く元奨学生・奨
学生が多く、職場で仕事と育児を
両立する姿がとても印象的でした。

ワーカーからの手紙

毎回、ワーカーの近況報告を掲載します。
今回は、バングラデシュの山内^{あやこ}章子さんと
タンザニアの弓野綾さんです。

オンクルール

バングラデシュ派遣ワーカー 山内章子

2・3月号で皆さんにお知らせした、障がいを持つ女性たちの新しい旅立ち。その後のことをお知らせしたいと思います。

外国からの寄付に頼るのが年々難しくなっており、販売によって生き残る道を選択せざるを得なくなり、自分たちの作った手工芸品を販売する店「オンクルール」を立ち上げました。障がいを持つ彼女たち全員に商売の経験が全くなく、いかに物を売ることが難しいかを思い知らされています。

リーダー格のミタさんは、両足に障がいを持ち、少し歩けますが、ほぼ車いすを使って生活をしています。子ども達の時のポリオが原因で両足にマヒがあります。小さいころは、足が多少曲がっていましたが、少しくらいなら走ることもできたそうです。しかし、曲がった足を



オンクルールの店の前での記念撮影。店を運営するスタッフたち。前列右から2番目がミタさん。

治す手術を受けた後、関節がぐらぐらになってしまい、それ以来、歩くのが困難になったそうです。ミタさんはいつも身だしなみに気を付けていて、とてもおしゃれです。髪の毛もきれいにまとめて、毎日しっかりお化粧をし、きちんとしています。暑い日でも服装が乱れることはありません。

そのミタさんが、首都ダッカやマイメンシンの繁華街にある店に自ら出向いて、流行や値段の相場を調べたり、伝統的な服の製造所を探したり、わたしたち女性クラブの工芸品を買い取ってくれる店を探したりと西に東に飛び回っています。障がいを持つ彼女にとってもそれは、決して容易なことではありません。時には、店の入り口が階段になっていて、段差が登れない彼女は、多くの人々が行き交う中、店先に座り込み、階段を座ってお尻で昇ったりもしました。いつもこぎれいに行っている彼女が、

プライドを捨てて、自分のところで働くほかの女性たちのために頑張っている姿を目にして、胸が熱くなりました。

4月のバングラデシュのお正月と、6月の終わりのラマダン（断食）明けのお祭り。わたしたちの稼ぎ時はこれまでに2度ありました。

4月は、女性たち手作りのお正月用子どもドレスが当たり、よく売れましたが、作れた数が少なかったのも、もっと前から作っていたら店を支えるだけの収入になったのにと後悔が残りました。断食明けのお祭りでは、いくつか売れましたが、販売したドレスが去年のモデルだったことや仕入れが遅かったことから、十分な収入につながりませんでした。数々の失敗をしつつも、これは来年のための勉強、とこの都度立ち直って、今に至っています。

まだ何も軌道に乗っておらず自転車操業状態ですが、皆さんのお祈りによって、まだつづけることなく、やっつけていきます。今後ともどうか祈って支えてください。



娘の苦しみ、母の悲しみ

タンザニア派遣ワーカー

弓野 綾

テデイさんは看護・助産師で、JOCsの元奨学生でもありません。主に聖アンナ・ミッシヨン病院の周産期病棟で働いています。

ある日彼女のお母さんが亡くなり、テデイさんは1週間ほど忌引で休みました。彼女が休んでいるとき、頼まれて周産期病棟の回診を手伝っていたところ、私服のテデイさんに、入院している女の赤ちゃんを診てほしいと頼まれました。赤ちゃんのお母さんはテデイさんの娘で、つまりその子はテデイさんの初孫でした。赤ちゃんは一昨日生まれて、特に異常がなかったのですが産後半日程度で退院したけれど、呼吸の様子がおかしいので今日病院へ連れてきたとのことでした。赤ちゃんは発熱して喘いでおり、マラリアの検査が陽性で、肺炎と敗血症も疑われています。

テデイさんたち看護師さん、周産期病棟担当の医師も含めて、皆でマラリアの薬等の注射、酸素投与、体温の調節などを試みましたが、残念ながら、数時間後に赤

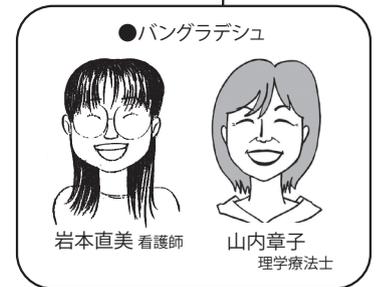
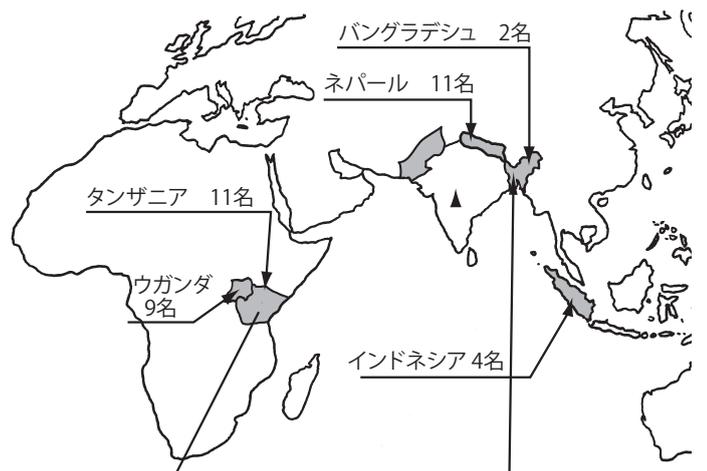
ちゃんは亡くなりました。テデイさんは短い間に二人の家族を見送ることになり、再度お休みを取られました。

その一週間後のこと、救急外来で診療していると、テデイさんが今度は娘さんを伴って現れました。娘さんはよく眠れず、食欲がなく、下腹部と乳房が痛むとのことでした。診察では、骨盤内の感染症・乳腺炎の徴候と抑うつ傾向があり、安全のために入院を勧めました。しかし、自宅で療養したいという娘さんの希望が強かったために、注射薬と内服薬を処方して、テデイさんが自宅療養を手伝いました。子を亡くしたお母さんの悲しみが深いと自分自身の体調に注意することも難しくなり、産後の危険が増すことにもなるのだ、と考えさせられました。幸い、その後数日して、娘さんは外来に来て、症状が改善してきたと説明してくれました。

タンザニアではお産にまつわる死亡が多いです。例えば日本では

(2017年7月現在)

JOCs派遣ワーカー・現在の奨学生数 (国名の後の数字)



新生児の死亡は10000出生あたり1人ですが、タンザニアでは26人、タボラ大司教区では関連医療施設内での死亡でも同35人と遥かに高い数字です。

テデイさんのお孫さんの死があつてから、周産期病棟で話し合いをして、産後24時間の間に母子を退院させることは止めよう、退院時には危険な症状をしっかりと説明して困ったらずぐに病院に戻るよう伝えよう、産後すぐの赤ちゃんに大勢の面会者を合わせるのには感染予防のためにやめよう、という改善が行われました。

た。さらに、産後の母子のケアの向上のための研修会と、巡回視察が2回行われました。今後も改善に向けた継続的な取り組みに関わられたらと思います。



弓野ワーカー(左)とテデイさん(写真の赤ちゃんは文とは関係ありません)



定時社員総会報告



左上) 開会礼拝での梁熙梅先生 上中央) 議案審議中の会場の様子 右上) 総会の司会をつとめた畑野会長
左下) 総会参加者の記念撮影 右下) 総会後の懇親会はなごやかな時間となりました

2017年6月10日(土)、東京・新宿区の日本基督教団信濃町教会で、第56回定時社員総会を開催しました。社員総数328名のうち、出席49名、委任状提出195名、議決権行使書提出21名、計265名をもって総会は成立しました。

はじめに、梅山猛初代JOC Sワーカーの活動映像を上映しました。梅山元ワーカーは1961年から1967年まで、2期6年にわたって医師としてインドネシアで活動されました。この映像は、約50年前のインドネシアの様子や診療風景などを記録したもので、出席者の方々は貴重な映像に見入っていました。また当日は梅山元ワーカーのお孫さんも会場にお越しになりました。

開会礼拝では、大宮シオン・ルーテル教会の梁熙梅先生から「道」と題してメッセージをいただきました。梁先生はJOC Sの社員会員であり、バングラデシュ・マイメンシンを訪ねるJOC S活動紹介ツアーに参加されたこともあり、メッセージでは、マイメンシンでの出会いについて触れながら、JOC Sの活動への励ましをくださいました。

つづく総会議事では、森田隆事務局長が2016年度事業報告を行ったあと、第一号議案である2016年度決算を榛木恵子財務委員長が説明、審議が行われ、承認されました。

報告の部では、2017年度事業計画、2017年度収支予算について、森田事務局長、榛木財務委員長が説明しました。

会場からは、財務諸表についての質問やワーカー派遣の考え方と今後の方針、2016年度に試みた広報用DVD作成のための助成金などについて、活発な議論がなされました。

最後に2名の新入スタッフの紹介が行われ、社員会員の鹿島友義さんの祈祷をもって閉会となりました。

総会終了後には、同じ会場で懇親会をもちました。40名以上の方がご参加くださり、元会長や元ワーカー、梅山元ワーカーのお孫さんの声を聞くことができました。

今年は、例年より多くの方がご来場くださいました。ありがとうございました。一般会員の方もご参加できますので、来年も多くの皆様をお待ちしております。



地区JOCsから



●**仙台JOCs** 切手整理作業「きつてきつぺ」を毎月第2土曜14～16時に仙台市市民活動サポートセンターで実施しています。6月は7名の参加でした。

●**足利JOCs** 6月11日(日)にクリスマスコンサートのためミーティングを行いました。今年も、どなたでも楽しく参加できるように準備していきます。

●**町田JOCs** 6月の例会には、町田JOCsの担当となった河井敦事務局長が参加くださいました。1997年に立ち上がった町田JOCsも今年で20年になります。ここまで活動が守られてきた事を神様に心から感謝しています。毎月第3水曜にメディアカルホームグラニー玉川学園にて切手整理をしています。チョコチョコキを一緒にしてくださいませ方お待ちしています。

●**京都JOCs** 7月28日(金)に第39回京都JOCsチャリティーコンサートを京都市民

ホールアルテイで開催しました。今回は中田麦(むぎ)さんによるマリ نبا(マリ)と雀理英(さざりえ)さんによるピアノのデュオリサイタルでした。詳しくは次号でご報告します。

●**大阪JOCs** 大阪JOCsカフェを7月7日(金)に開店しました。今回のゲストスピーカーは船戸正久さん(医師)で、NICU(新生児集中治療室)での低体重出生や障がいのある赤ちゃんとの関わり、家族へのケア、医療的ケアが必要な子どもたちとの長年の交流について話をお聴きしました。詳しくは次号でご報告します。

●**芦屋JOCs** 6月18日(日)午後2時より、芦屋聖マルコ教会にて芦屋JOCsのつどいを開催しました。今回は、畑野研太郎JOCs会長より「あらためて、なぜ国際協力？」というテーマで話をいただきました。また安田美穂子さん(ヴォーカリスト)の素晴らしい歌声のコンサートもありました。100名以上の来場者があり、お話も歌も満足していただけるものだったと思います。茶話会にも多くの方が参加くださいました。

●**神戸JOCs** 11月18日(土)午後2時から、日本キリスト教団兵庫松本通教会で神戸JOCsのつどいを開催します。講師は船戸正久さん(医師)です。次回委員会を8月19日(土)に開催し、チラシ、役割分担など最終確認の予定です。次号で詳しくお知らせします。

●**四国高知JOCs** 11月26日(日)に日本キリスト教団高知教会で植松功JOCs理事を講師に迎えてつどいを行います。このイベントについて6月3日(土)の例会で話し合い、11月25日(土)に中村栄光教会で、27日(月)に高知市内の教会で、テゼのつどいを開催したいという希望が出ました。それに向けて、9月9日(土)に例会を開催し、準備を行います。

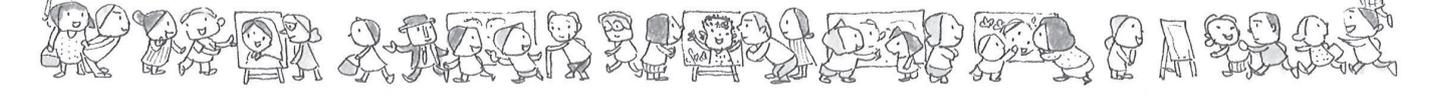
お問い合わせはJOCsの各事務局へ
東京事務局へ…仙台・足利・町田JOCs
関西事務局へ…大阪・京都・芦屋・神戸・
四国高知JOCs

電話番号は16ページをご覧ください

ご入会

ありがとうございます (3～6月)

- 北海道／鳴山りえ子、神谷順子
- 栃木県／中村政彦 群馬県／清野使門 埼玉県／唐沢龍志、佐竹豆子 千葉県／三代川リュウ、土岡幸枝、田中和子、吉木英里子 東京都／森河良太、飯田多香子、結城恵子、北澤恵子、佐々木典子、宮本瑞夫、河井敦、藤代國忠、佐藤芳子、後藤信哉
- 神奈川県／金子真、高橋恵太郎、山本稔 富山県／黒田与子
- 長野県／吉川春代 静岡県／吉田君子 京都府／城山久美子
- 大阪府／伊東鳴実、浦木多美子、軽澤稀糸、端野孝子、都留真理、安田美穂子 兵庫県／石野祥子、今福昌代、宇賀克夫、宇野良彦、川村須美子、野木芳子、村田充八 奈良県／法村達也 和歌山県／城房子、武藤直二 広島県／山根寛子 福岡県／浅野直人、室岡美代子 沖縄県／聖マリアの汚れなき御心のフランシスコ姉妹会(敬称略)



関西でのイベント報告。

関西JOCSS2017

弓野綾ワーカー活動報告と 関西学院聖歌隊のコンサート

5月20日(土)、神戸市六甲にある日本キリスト改革派神港教会において、「関西JOCSS 2017」を開催しました。

当日は天候に恵まれ、約140名の方々がお集まりくださいました。

今回は、タンザニアにお連れ合いを伴って赴任し活動している弓野綾ワーカー(医師)が、「タンザニアで出会った涙と笑い」『み



関西学院聖歌隊の皆様



多くの皆様がお集まりくださいました

んなで生きる』を考える」というタイトルで、活動報告をしました。民族衣装で舞台上に立った弓野ワーカーは、終始笑顔で話をされましたが、活動はとても困難な状況の中で行われており、その様子をリアルにお伝えすることができませんでした。

その後は、関西学院聖歌隊の皆様によるコンサートがあり、アカペラで歌う美しいハーモニーに、会場一同聴き入りました。

最後に、聖歌隊のリードと神港教会の素晴らしいパイプオルガンの伴奏で、JOCSSのテーマソング「みんなで生きるために」を会場皆で歌いました。

イベント後の茶話会にも多くの方々が参加くださり、弓野ワーカー夫妻、元ワーカーの方々、久しぶりに集われた会員の方々と楽しい交わりの時となりました。



活動報告をする弓野ワーカー

一泊一食 関西バザー開催

370人ものご来場がありました



多くの人でにぎわったバザー会場

関西バザー委員会主催の第23回関西JOCSSバザーが、5月13日(土)、大阪聖パウロ教会にて開催されました。

当日は朝から大雨で、お客さんが来られるだろうかと心配しましたが、バザーが始まる午前11時には雨も上がり、370人以上の方々がご来場くださいました。

毎年なのですが、開場と同時に多くの方々がご入場され、あっという間に人でいっぱいになりました。

2階の食堂もお昼には満席になり、バングラデシュカレーやおでん、豚汁などおいしいそうに召し上がっておられました。

純利益は100万円以上となり、関西バザー委員会からJOCSSへ寄付されました。ご協力、ありがとうございます。



アジア・アフリカの人々とともに生きる喜びを、
あなたのお友だちにお伝えください。

お友だち紹介 キャンペーン 実施中!



JOCsの活動は、会員・支援者の皆様に支えられています。困難な環境の中で活動するワーカー、地域の人々のために働く奨学生たちにとって、多くの方々に支えられているということは、何よりの励みになります。

「ともに生きる喜び」を分かち合う輪を広げるため、今年10月までお友だち紹介キャンペーンを実施しています。ぜひこの機会に、会員としてJOCsの活動を支えてくださるご友人をご紹介ください。ご紹介くださったあなたにも、入会くださったご友人にも、バングラデシュで障がいのある女性たちが作ったクリスマスプレゼントが届きます。

詳しくは『みんなで生きる』4・5月号同封のチラシをご覧ください。または東京事務局までお問い合わせください。

参加者募集 JOCs海外派遣希望者向け

国際保健医療協力フィールドセミナー

東京・山谷で

人々とともに生きる姿勢を学ぶ

かつて日雇い労働者の町と言われ、40年ほど前に地図から名前が消えた「山谷」地域。経済や社会の変化とともに日雇いの仕事が減り、現在、山谷周辺におられるのは50〜60歳の失業者や高齢者が多くなりました。また近隣の隅田川沿いでテント生活、路上生活をす

日時：2017年10月4日(水)
(日帰り)

場所：東京都荒川区南千住、台東区清川周辺

る人々も増えていきます。厳しい環境で生活する人々の多くは、特に体力の低下が目立ち、心身の障がい、様々な事情や生きづらさを抱えて、孤独のなかで辛い暮らしを余儀なくされています。このセミナーでは、困難な状況にある人々に寄り添い、山谷地域で長年にわたり活動してきた方々から、ともに生きる姿勢を学びます。

活動内容：①山谷地区の概要紹介、活動する方々の話、②無料医療相談・診療活動、③アウトリーチ・炊き出し等
参加費：2000円(保険代、食費、訪問先謝礼等。現地までの交通費は含みません)

募集対象者：JOCsからの海外派遣に関心のある医療従事者、医学・看護等を学ぶ学生
定員：5名

*活動内容は変更の可能性がります。ご了承ください。

JOCsの使命に共感し、海外で活動する志のある方の参加をお待ちしております。

お申し込み・お問い合わせ
東京事務局(担当：松浦)
seminar@jocs.or.jp

みんなで生きる 子ども号 をいっしょにつくってみませんか？

「みんなで生きる」子ども号作成にご協力くださる小学生を募集します。ご関心のある方、ぜひお申し込みください。

★内容：子ども号の企画についての話し合い、JOCSの活動の取材、原稿作成など

★応募条件：JOCSを支援してくださっている学校・教会・ご家庭の、小学校中～高学年の児童。8月～9月に数回、東京事務局（東京都新宿区）に来ることができる方で、文章を書いたり自分で調べたりするのが好きな方。事務局職員が作業をサポートします。保護者の方には、事務局への引率や原稿作成のサポートをお願いいたします。

★募集人数：1～3人程度

★待遇等：ご自宅から東京事務局まで公共交通機関を利用した往復交通費の実費（上限あり）。ボランティア保険への加入。日当等はお出しできません。



★作業スケジュール：8～9月の平日の午後または土曜日・日曜日に、数回の打ち合わせ・作業日を設けます。その後9月まで取材、原稿の作成など、10月に校正原稿のチェックなど（郵送による作業）をしていただきます。作業日はご相談のうえ決定します。

★お問い合わせ：東京事務局（高橋）

電話：03-3208-2416 FAX：03-3232-6922

メール：info@jocs.or.jp

★お申し込み：所定の用紙（東京事務局へご請求ください）を、8月30日必着でご提出ください。



昨年の子ども号制作の様子。

東京事務局 新任スタッフ紹介



飯田多香子

6月1日にJOCS事務局に入局いたしました飯田多香子と申します。

JOCSの活動は、たくさんの方々の思いの輪が繋がっている活動であること、また、着実に未来へと続いている活動であることを実感する日々です。

神様の愛を、少しでも助けを必要としている多くの人々に届けられるよう、お手伝いしていきたいと思っております。

事務局で見慣れない顔を見かけましたら、どうぞお声をかけてください。

なかなかお会いできない皆さまとは、JOCSの活動、そして、世界平和のために、共に祈ることができそうです。どうぞよろしくお願ひいたします。

JOCSの動き

東京事務局…〈東京〉
関西事務局…〈関西〉

28日(土)	23日(月)	20日(金)	17日(火)	9日(月)	3日(火)	◎10月	30日(土)	30日(土)	20日(水)	18日(月)	17日(日)	16日(土)	9日(土)	9日(土)	2日(土)	◎9月	26日(土)	19日(土)	12日(土)	7日(月)	◎8月	
オープンオフィスデー〈関西〉	佳子職員カンボジア出張	森田隆事務局長・松浦由	チャリティ映画会〈江東区カメラリアホール〉	19日(木) 服部由起職員インドネシア出張	11日(水) 森田隆事務局長タンザニア出張	11日(水) 森田隆事務局長タンザニア出張	10月1日(日) グローバルフェスタJAPAN2017に出席〈お台場セントラルプラザ〉	10月1日(日) グローバルフェスタJAPAN2017に出席〈お台場セントラルプラザ〉	町田JOCS定例会〈メディアカルホームクラニー玉川学園〉にて毎月第3水曜日に開催	定例理事会〈東京〉	荻屋JOCS委員会〈荻屋聖マルコ教会〉	看護チーム訪問ケア活動〈釜石市〉	18日(月) 看護チーム訪問ケア活動	17日(日) 看護チーム訪問ケア活動	17日(日) 看護チーム訪問ケア活動	奨学金委員会〈東京〉	26日(土) オープンオフィスデー〈関西〉	5カ年計画2018検討委員会〈関西〉	神戸JOCS委員会〈神戸YWCA分室〉	市民活動サポートセンターにて毎月第2土曜日に開催	大阪JOCS委員会〈関西〉	◎8月

イベント案内

チャリティ映画会 (東京)

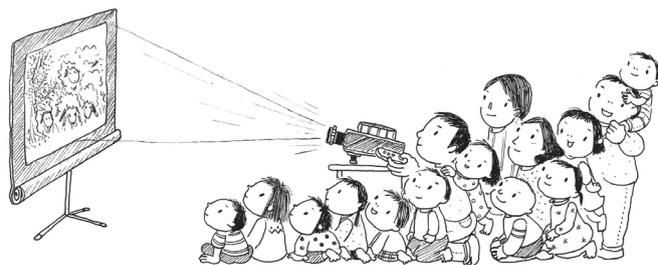
10月20日(金) 開催!

三浦綾子原作

母 小林多喜二の母の物語



10月のJOCSSチャリティ映画会の作品が決定しました。『母 小林多喜二の母の物語』です。『蟹工船』などのプロレタリア文学を世に書き残し、治安維持法下で殺された作家、小林多喜二。「わだしは小説を書くことが、あんなにおっかないことだとは思ってもみなかった。あの多喜二が小説書いて殺されるなんて」。何も悪いことをしていないのに殺されたイエスと多喜二の姿を重ね合わせ、思いを巡らすセキ。多喜二という息子を最後まで信じ支えた、心優しい母親の物語です。



- 開催日時：2017年10月20日 (金)
10：30／14：00／18：30 (各回開演の30分前開場)
- 会場：カメラアホール (JR亀戸駅徒歩2分)
東京都江東区亀戸2丁目19-1 カメラプラザ3階
- チケット：前売り1,200円 当日1,500円
- 原作：三浦綾子『母』(角川文庫)
- 監督・制作総指揮：山田火砂子
- 出演：寺島しのぶ 塩谷瞬 趣里 山口馬木也
徳光和夫 赤塚真人 佐野史郎 渡辺いっけい
- お問い合わせ：東京事務局 (03-3208-2416)
- チケット購入方法

【前売り券・先払い】 郵便局備え付けの払込取扱票でお振り込みください。その際、通信欄に①住所②名前③電話番号④チケット枚数をご記入ください。入金確認後、チケットを郵送します。

- ・振込先：ゆうちょ銀行
- ・口座番号：00190-2-97157
- ・加入者名：日本キリスト教海外医療協力会
- ※振込手数料はご負担ください。

【前売り券・当日支払い】 ①名前②電話番号③チケット枚数を下記までお知らせください (受け付けは前日17時まで)。

電話：03-3208-2416、FAX：03-3232-6922
E-mail：movie@jocs.or.jp
ホームページ：www.jocs.or.jp

【当日券】 当日会場でお買い求めください。前売りで完売した場合、当日券販売はございません。

日野原氏を含むクリスチャンの保健医療従事者が立ちあげた日本キリスト者医科連盟が、1959年にアジア諸国からの医学研修生を日本に招き、それがJOCSSの設立の契機となりました。以降、ご逝去なさるまでずっと社員会員としてJOCSSをお支えくださり、2013年にはJOCSSチャリティー講演会での講師を務めてくださいました。

主の御許に帰られた日野原重明様の魂が安らかに憩われますようお祈り申し上げます。

105歳のご生涯でした。

訃報

今号の数字

使用済み切手 運動協力状況		会員状況 (6月末現在)
● 5・6月分 協力件数	2999件	
● 受託量	213箱	
1箱7.5キ口		
		● 会員数 3791名
		● 3～6月 入会者数 47名

「みんなで生きる」ために働くワーカーを募集しています

JOCSは、すべての人々の健康といのちがまもられる世界をめざして、イエス・キリストの教えに従い、困難の中にある人々の健康といのちをまもり、人々と苦悩・喜びを分かち合いたいと考えています。

JOCSは、何よりも弱くされた人と共に生きることを喜びとし、困難を伴う活動に取り組むワーカー（クリスチャン保健医療従事者）を求めています。

現在、求められている職種は、外科医・整形外科医・産婦人科医・小児科医・保健師・助産師・看護師・理学療法士・作業療法士などです。

- *派遣国、派遣先団体は、個別にご相談いたします。
- *上記いずれの職種も、経験5年以上の方を求めています。
- *英語力はTOEIC700点以上が目安です。
- *海外赴任期間は通常3年ですが、64歳以上の方は2年以上で個別にご相談いたします。
- *任地によっては、短期ワーカー（1カ月～1年未満）の派遣が可能な場合もあります。

<お問い合わせ先> JOCS 東京事務局 TEL 03-3208-2416 FAX 03-3232-6922
担当：森田 隆（事務局長） E-mail：ryu@jocs.or.jp

グローバルフェスタに参加します

2017年 9月30日(土)・10月1日(日) 東京・お台場にて 入場無料

今年もグローバルフェスタに参加します。今年の開催テーマは「Find your Piece!～見つけよう、わたしたちにできること～」。JOCSでも、いつでも誰でも気軽にできる切手運動や、海外での医療協力活動の紹介に一層力を入れていきます。当日会場で使用済み切手を集めますので、ぜひお持ちください。そして今年は、アジアの民族衣装の試着&撮影コーナーも設置しますのでお楽しみに！

ほか、カードや小物・雑貨等も販売します。ぜひお問い合わせの上お立ち寄りください。

■開催日：2017年9月30日（土）・10月1日（日）
10～17時

■開催場所：お台場センタープロムナード
（シンボルプロムナード公園内）
東京都江東区青海1-2

■お問い合わせ：
東京事務局
TEL：03-3208-2416



グローバルフェスタのJOCSブース

公益社団法人 日本キリスト教海外医療協力会 http://www.jocs.or.jp

- 東京事務局 〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18-51
電話：03-3208-2416 FAX：03-3232-6922
- 関西事務局 〒530-0013 大阪市北区茶屋町2-30
電話：06-6359-7277 FAX：06-6359-7278
- E-mail info@jocs.or.jp
- 編集発行人 代表者 畑野研太郎
- 編集長 森田隆（JOCS事務局長）
- イラスト 石橋えり子 柏木牧子
- 誌代 1部300円(送料込)
JOCS会員は会費の中に本誌購読料が含まれています。
また年間1万円以上（購読料含む）の寄付をしてくださった方にお送りします。
- 郵便振替口座番号 00170-1-20920

事務局便り

関西事務局は、大阪市の非常に賑やかな所、梅田にあります。大阪聖パウロ教会の3階をお借りして、活動をしています。便利な所にあることと、教会の中にあることでもいつも多くの方が事務局を訪ねてくださいます。いつも切手を持ってきてくださる毎日放送の素敵なお姉さま、映画を観に来たついでと寄ってくださるおばさま、上の階の関西NGO協議会に来たからと他のNGOの方々。どうぞ、次はぜひあなたも関西事務局に気軽にお立ち寄りくださいませ。お待ちしております。（渋江）